

響 風

Hibiki Winds



出典：戸田幸一 切り絵作品より

あしや旬会

第 5 号

はじめに

月日の経つのが早い。一日、一週間、一ヶ月と何やかやとしているうちに、気がつけば一年が過ぎている。淡々と過ぎていく日々の中で、月一―二回の吟行での句は記録として残り、その一日の記憶が甦る。若い頃には全く考えもしなかった自分の足跡を残したいという気持ちは年を重ねてきた証拠でもあるのだが、その時その場で作った句は、確実に自分のある一日を写している。

平成二十一年はどんな一年だっただろうか。

一月の戸明神社のどんど焼きに始まり、東長寺の節分祭り、柳川の雛祭り、篠栗の南蔵院、田川の神幸祭、博多の祇園山笠、油山の徳栄寺など祭礼や神社仏閣を吟行し、そのほかに動物園、植物園や皿倉山などを吟行。貝寄風句会としては、四月に昇先生の受賞祝賀会を兼ねた京都・奈良吟行句会に参加し、十一月には湖北吟行を九州組が企画し遂行する。

一つ一つが思い出される。特に湖北吟行は日にちや場所設定まで任されていたので、先生・桂子さんのご都合を聞きながら、できるだけ疲れがでないようなスケジュールで且つ多くの人が参加できるようにと調整を続け、三日間皆の協力により滞りなく句会が終えることができた。

この湖北吟行では、今まで参加するだけで精一杯だった吟行句会を自分達が企画することによって多くのことを学ばせていただいた。土日の宿の確保、句会場や移動時間、所要時間など皆が気持ちよく過ごすことができるようにと日程を作り、宿とした国民宿舎に遊覧船の手配、料理や送迎バスの件など、またタクシー会社には料金等等何度も連絡をいれ準備をする。大変といえば大変だが、吟行場所の地図も写真もネットの画面上で見ることが出来るので、訪れたことがなくても現地の様子が大体分かりスムーズに事を運ぶことができた。まだパソコンが普及していなかった頃の吟行句会を考えると、これまでお世話してくださった方々の配慮を本当に有難いと思う。

今ネット上ではツイッター（つぶやき）なるものが流行っているらしい。そういうものには無縁だが、ネット検索で吟行地や食事処を探して、今年も句会の短冊に納得の五・七・五をつぶやきたいと思うこの頃である。

平成二十二年二月

江本 由紀子

響風 第五号 目次

■はじめに

■吟行記

第五十一回	戸明神社のどんど焼と若松北海岸	1
第五十二回	節分祭	6
第五十三回	川下りと雛祭り	11
第五十四回	南蔵院	17
第五十五回	川渡り神幸祭	22
第五十六回	箱崎の紫陽花と菩提樹の花	30
第五十七回	博多祇園山笠	38
第五十八回	皿倉山	46
第五十九回	到津の森公園	51

第六十回	駕与丁公園	56
------	-------	----

第六十一回	西油山・徳栄寺周辺	61
-------	-----------	----

第六十二回	キャナルシテイー・中州川端通り	67
-------	-----------------	----

■自選句

二十六～二十七	平成二十年十二月～二十一年三月	72
二十八～二十九	平成二十一年四月～七月	74
三十～三十一	平成二十一年八月～十一月	76

■あとがき

吟 行 記

(第五十一回～第六十二回)

第五十一回吟行記

平成二十一年一月十五日(木)

参加者 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

戸明神社のどんど焼きと若松北海岸

(北九州若松区・遠賀郡芦屋町)

一月は新年の行事があちらこちらで行なわれている。句会日の十五日に何か行事はないかと調べると、近くの戸明神社で「どんど焼き」が行なれると回覧板に書いている。さっそく神社に問い合わせると、神事が十時から始まるという。子供会や自治会主催のどんど焼きには参加したことがあるが、神事のあるどんど焼きは知らない。俄然興味がわき吟行地に決める。九時半折尾駅集合。車で神社に直行する。



氏子らしい人たちが二十人くらい集まっている。境内には注連縄が張られ、

その中に正月のお飾りや破魔矢などが円錐形に高く積み重ねられている。後から持ち込まれたお飾りは、入口の箱に入れるように指示される。社務所から二人の禰宜が出てきて神事の用意を始める。

簡単な奉納台に酒、塩、水の三宝が置かれ、大きな蠟燭に火が灯される。玉串の奉納、祝詞が始まり、皆神妙な面持ちで頭を下げる。禰宜の一人が蠟燭を持ち上げ、積み重ねられている古札やお飾りに火を移す。火は燦りやがてめらめらと広がり昇っていく。



簡単な神事ありけりどんど焼き

佳与子

どんど焼禰宜の祝詞に生まれり

由紀子

祝詞よむ禰宜親子らしどんど焼

真理子

御神火の静かに移るどんどかな

真理子

神事が終わると、氏子等はどんど焼きの回りを囲み、先が二手に分かれた狩股の木で、よく燃えるように掻き上げていく。その火の上に、待ち込まれて箱にいれていたお飾りなどをのせていく。火の勢いは強くなり、四



方にめぐらした注連縄を揺らしながら高く舞い上がり、禰宜が神事に用いたお神酒を降り注いでいく。火の粉や灰があまり広くない境内に散り、どのどの押さえとして置かれていた大きな青竹が時折爆ぜる。平日で子供達のないいんどんど焼きは、肅々として執り行なわれていく。藪椿などの木々に覆われた社には鳥の音がひびく。

かき上げる時に鈴の音どんどの火 節子

どんど焼ときに鈴の音鳴らせつつ 節子

火櫓を煽る山風どんど焼き 佳与子

氏子等の狩股休みなき左義長 真理子

組まれたる青竹太くどんど焼 節子

四方に張る注連を揺らしてどんどの火 由紀子

結界の注連より高くどんどの火 佳与子

口笛で冬鳥の声教えくれ 真理子

この戸明神社本宮はこの辺りの神社の総社として崇敬されてきたと案内板に書かれている。この辺りには戸明神社があちこちにあるので不思議に思っていたが、ここが本宮で他は末社らしい。境内に記念写真用の看板があり、顔だけ入れれば大きな岩を持ち上げた格好になる。ここは日本神話の「天の岩戸開き」で岩戸を開いた天手力雄大神（あめのたぢからのおおかみ）と岩戸の前で祝詞を奏上された美声の持ち主の天児屋根大神（あめのこやねのおおかみ）をお祀りしており、開運の力神様として大相撲の力士やスポーツ選手もお参りに来るといふ。

まだ竹が爆ぜ、どんどの火が残ってはいるが小さくなってきたので、食事処の開店時間まで近くの若松北海岸まで車を走らせる。昼食は蟹住（あまずみ）にある「ポセシヤルダン」。こんな所にフランス料理のお店があるなんてと思わせる畑に囲まれた小さな人形館のようなかわいいお店だ。県道沿いで裏手には小川が流れている。少し歩いてみるが寒い。だんだん晴れてきたの



で同じ寒さならと、海岸沿いの「マリントラスあしや」まで行くことにする。

相変わらずひびき灘の風は強い。以前来た時は春一番の強風と雨で行けなかった崖下の遊歩道を歩こうとしたが、今回は工事中。展望台より芦屋の浜や洞山や遠くひびき灘を見渡す。真っ青な海と白波が身の切れるような風の中に美しい。ゆるやかなカーブとなって伸びる三里松原に向かって、波しぶきは煙のようになびいている。

番住といふは土地の名北風強し

真理子

岩礁に尖る白波風花す

由紀子

群青の色を重ねて冬の海

光子

基地近し機影旋回冬の暮れ

由紀子

芦屋の航空自衛隊の基地が三里松原に守られているかのように広がっている。飛行機の音を頭上に聞きながら「マリントラスあしや」の建物に入り、冷えた体を温める。何かの会合がちやうど解散したよう出入りの人が多かったが、一階の休憩所の席が空き、十句の句会。

帰りに海岸沿いに二三年前にできた「とと市場」に寄って干物や野菜など買い物をして若松を後にする。若松の住人としては、何か手土産を持たせたような気分で折尾駅まで皆を送り届けた。



【「マリントラスあしや」よりの若松北海岸方面の眺望】



【境内の藪椿】



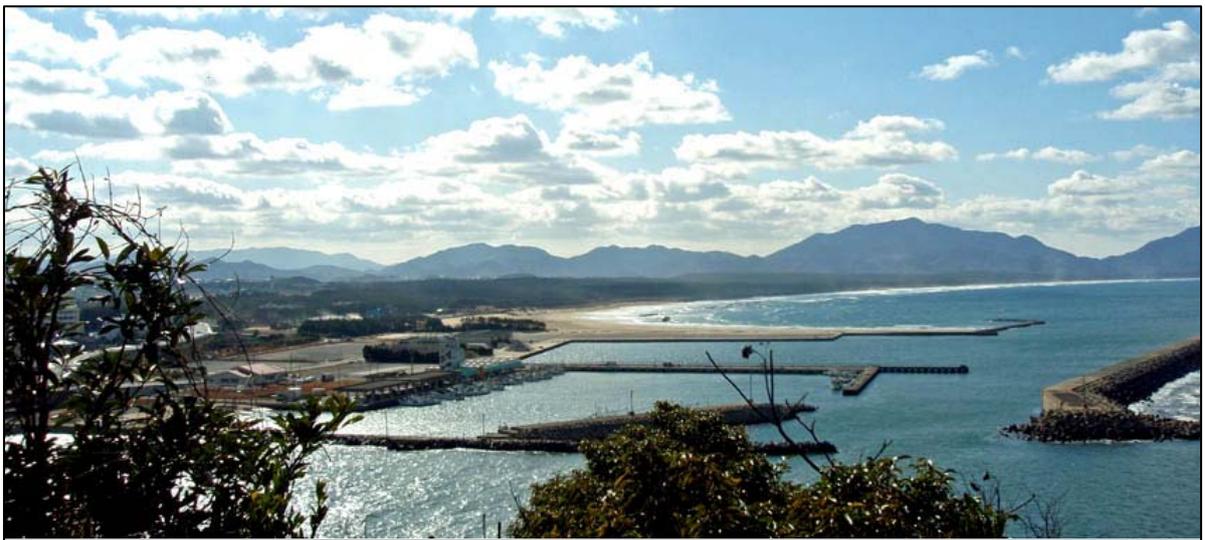
【どんど焼の祝詞奏上】



【注連縄をゆらし燃えるどんどの火】



【「なみかけ大橋」方面の眺望】



【芦屋港方面の眺望】



第五十二回吟行記

平成二十一年二月三日(火)

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 由紀子

節分祭 (福岡市博多区)

今年の旧正月は一月二十六日。浅い知識しか持ち合わせていないと判っているが、漠然と旧正月が立春で、その前日の節分が一年の邪気を祓うべき大晦日にあたると思っていた。そもそも正月の日にちが毎年変わるとは思ってもいない。暦は太陽暦に統一されたが、中国では旧暦の正月(春節)を盛大に祝い、旧暦の不都合な部分を補う二十四節気を活用している。この流れを汲む日本も暦には書かれ、季節の指標としている。節気は太陽の軌道上の位置を分けているので、太陽暦では毎年ほとんど同じ日付となる。

小寒、大寒、立春、雨水、啓蟄と続き、冬至で終わる。

ともあれ年の初めの十日恵比須といい、節分祭といい、縁起ものの行事は神聖な気持ちと面白さがあり、今年も行かねばと気持ちがあく。さてどこにしようと考えたが、去年の雨の宮地獄節分祭を思い出すと、季節柄暖かい所に逃げ込める街中がいい。

二月三日十時博多駅集合。今年も予報通りの雨。聖子さんが櫛田神社で豆を撒くらしいとは聞いて



いたが、一昨年のすぎましい奪い合いの豆撒きに尻込みするところもあった。駅から近い「東長寺」の節分祭にまづ行ってみようということになった。神社ではなく寺の節分祭は初めてである。「東長寺」は弘法大師建立の寺として日本で一番古い霊場である。

大通り節分祭の旗なびく

節子

寺町に追儼の声のひびきけり

光子



広い大通りに面した大寺に節分祭の旗が掲げられている。境内に一步足を踏み入れると、桜の一樹が上にはなく横に冬芽を張らせている。雨にもかかわらず参拝の人は多く、テントの中に祈願、福引の受付が設置され、境内の奥には注連を張った場所で古札などを燃やしている。甘酒も売られ体を温めている人もいる。

薄暗い本堂に入ると、広い畳に多くの人が座っている。すでに豆撒きは始まっているらしく、七福神や善男善女が袋に入った豆やお菓子な

ど撒いている。わずかに空いている所に座ると突然ミカンが飛んできたのはびっくりしたが、前の人の肩越しに飛んでくるものを手で掴み取る。



これがなかなかで、前の方ばかりに撒かれ、後ろまでは来ない。ミカンと飴一つを袋に入れると、寺の関係者か、箱の中に福豆など入れて、要る人にはさしあげますと配っている。「東長寺」の文字入りの福豆を有難くいただく。寺の配慮が嬉しい。

本堂の横の大仏殿には高さ約十一メートルもの「博多大仏」が鎮座している。大仏の台座の中はトンネルのようになっていて地獄絵、全くの暗闇、そして明るい地上へと抜けるようになっていて。宝物殿には十一面観音像や多聞天像などが公開されている。それらを拝観して本殿へ戻ると、護摩焚き祈願祭が始まろうとしている。ご祈願やお参りの人でぎっしりと埋まった本殿に声明が響く中、僧侶三人が次々に護摩木を燃やしていく。火の粉が高く天井まで上り、煙が上のほうから全体を包む。

護摩を焚く火の粉上がりし寒の寺 光子

一文字の寄進の瓦鬼やらひ

佳与子



ご祈願を申し込む人が並び、広い本殿は人であふれている。途中で外にでるとまだ雨は降り続けている。本殿入口の紅白の幕の張られた特設の壇には水たまりができています。晴れていれば豆撒きはここで行なわれたのであろう。境内の六角堂の中に安置されている六体の弘法大師・薬師如来・文殊菩薩像などが開帳されているので拝観して寺を後にする。

御厨子の小さき御堂鬼やらひ

佳与子

この後榎田神社の節分祭にも参加するのだが、榎田神社の祇園山笠の追い山の時、この東長寺にも「清道旗」が立ち、正門前に並ぶ僧侶の前で昇き回る。明治元年に神仏分離令が発布されるまで、東長寺に属する神護寺が榎田神社を管理していたことから、山笠は今でも東長寺に敬意を払い清道旗を立てていることを知る。

榎田神社参道沿いにあるレストランに入り、昼食。見過ごしてしまいそうな小さな看板のお店。若いシェフの出すイタリアンは美味しい。「いざ出陣」の心構えで榎田神社に向う。会場に着くと、ちょうど綺麗所らしい日本髪の女性達が撒き終え、



祝い唄と手一本で締めている。(日本髪の女性たちは何かのキャンペーンで節分にも参加だったと夜のニュースで知る) 聖子さんとも合流。聖子さんの豆撒きには間に合わなかったが、「福」のオーラを分けていただく。

山笠を飾り櫛田の追儼かな

佳与子

年の豆入れしポケット見せくれし

佳与子

雨にぬれ汚れてもゐる豆拾ふ

光子

三十分おきに豆撒きはあるので、本殿のお参りや祈願などを受ける。一昨年祈願証は書いてもらったものの、そのまま帰ってしまったので、今年はお祓いも受けることにする。豆撒きに参加の人はそれぞれに福豆を手をしている。雨の中での豆撒きに傘を逆さにしている人もいたようだが、これはいただけでない。近くの冷泉閣ホテルの喫茶室にて十句の句会。

この日眞理子さん欠席。締め切り日まで日にちがあるので、集まることのできる人でもう一度吟行句会をしようという話になり、二月十七日(火)福岡の植物園と平尾山荘を吟行。この日も雨。句のみ掲載。

草庵の庭とは小さき梅匂ふ

佳与子

二分乗るスロープカーや落の臺

佳与子

寒禽のただ鳴くばかり司教館

節子

菜の花の辺り明るき植物園

節子

白梅のあらかた散りて枝伸びて

聖子

春時雨古りゆくままの時計塔

聖子

草の庵ひとめぐりして春泥に

眞理子

篠竹の茎のあらわに春寒し

眞理子

噴水の音ふと途切れ春寒し

眞理子

勤王の尼の庵や野水仙

由紀子

窓広し枝を広げし花ミモザ

由紀子



【東長寺境内の六角堂と堂内の仏像】



【東長寺本殿内での豆撒き】



【東長寺境内】



【榎田神社：一】



【榎田神社：二】



【榎田神社：三】

第五十三回吟行記

平成二十一年三月十日(火)

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 真理子 由紀子

川下りと雛祭り (柳川市)

三月はやはり雛祭り。今年はどこにしようかと色々迷った。あちこちで開催され宣伝されている。昔から日田や柳川は有名だが、福岡県では吉井町や八女の雛祭りも観光客を集めている。雛人形というより雛祭りの町の雰囲気を楽しみたいので、ネットでも探してみる。その中で往復の時間や独特の「さげもん」と呼ばれる飾り物を天井から吊るしている柳川の雛祭りは魅力的だし、その柳川に今年はランタン人形も飾られるというので、何度か足を運んだ人もいるだろうが、吟行することに決める。



柳川に行くには西鉄電車の大牟田線に乗るのが便利。それぞれに乗る駅が違うので現地集合する。北九州からはJRで博多駅で降り、地下鉄に乗り換えて天神まで行く。ここで「特盛切符」を購入。これは往復乗車券と川下り乗船券と食事処がセットになっているもので、時間の制約がないので句会時間を気にせずできるお得な割引切符だ。

十一時十五分西鉄柳川駅に到着。改札口の向こうで節子さん、真理子さんが手をあげている。川下りの乗船場まで遠くないらしいが、送迎バスがあるというので利用する。補助席全部使って全員乗車。

降り立ちし駅に始まる雛の旅

佳与子

二十人乗れば満席春のバス

節子

川下り乗船場行春のバス

節子

船べりに桃の枝さし客を待つ

真理子



乗船場は赤い欄干の橋を渡った「松月文人館」前。柳川ゆかりの文人たちの資料や歌碑などがあるらしいが、川下りの所要時間と昼食時間を考えると見学する余裕がない。さっそく「どんこ舟」に乗り込む。舟は何隻も並び次々に動き出す。舟の真ん中には炬燵布団が置かれ、靴を脱ぎ足を入れる。

熟年のグループや若いカップルなどと一緒に船頭の説明に耳を傾け、水辺の景色に目を向ける。芽吹き美しい柳や思いの外透明な水面をすべるように進んでいく。年に一度の「水落ち」と呼ぶ堀の掃除の後だったようだ。

縦横にめぐる掘割柳の芽

節子

掘割に十字の水路こぶし咲く

佳与子

舟人の肩をひと撫で柳の芽

佳与子

堀に舟沈みてをりぬ舟遊

真理子

春暁の中ひっそりと四手網

聖子

乗合わす人と写真や木々芽吹く

由紀子

有明海に面した柳川が、非常に平坦な地形故に水に恵まれなかったとは驚きだ。江戸時代に本格的に作られた掘割は人々の生活になくはならぬいもので、また柳川城が巡らされた掘割によって難攻不落の堅城だったと聞く。今は観光用の川下りとして利用されているが、地面より低い川からゆっくり町を眺めるのは面白い。堀割はまさに生活の場の中を通っている。「汲水場」や堀を隔てて作られた「水中庭園」は柳川ならではである。舟一隻通るだけの狭い堀や小さな橋を潜る度に頭を低くする。両岸には川下りの客用に二く三軒珈琲やビールや土産物を売る店があり、客の呼び込みをし



ている。桃の花や水仙などの春の花が咲く中に歌碑や句碑が建ち、木々の枝が水面すれすれに伸びている中を舟が行き交う。七十分のコースがあつという間に過ぎる。船頭は昨年秋までサラリーマンだった人で、唄も棹捌きも新米。棹を引くたびに近くに座った人に水がかかったようだ。舟を漕ぐ練習中に何度か水の中に落ちた話など聞くと、風の強い日でなくてよかったと思いつつ、またそれもお愛嬌かなと思う。

芽柳の先の水面につきさうに
光子

水澱むところほうけて落の臺
真理子

からたちの棘を育む春の風
真理子

水舞台めく雛壇に舟寄せて
真理子

その家の雛飾られ汲水場にも
真理子

差して引くたびに舟棹春の水
佳与子

差し交わす枝をくぐりて雛の舟
佳与子

すれ違ふ船頭の歌春の風
節子

白秋の歌碑にけむれる糸柳
由紀子

川下る舟は雛の館まで
由紀子

終着のこ、船着き場雛飾り
佳与子

川下りの終点は柳川藩主の立花家の別邸「御花」。柳川観光の中心的な「御花」は明治時代に建て替えられた建物だが、史料館、大広間のある本館や西洋館や「松濤園」と呼ばれる庭園は、管理を市に任せることなく十



六代当主が宿泊や宴会場、料亭として現在も運営している。
午後一時昼食。食事処の和室で鰻のセイロ蒸しやドジョウの柳川鍋の付いたご膳をいただきながら過ごし、食後本館の雛の部屋へと向う。大広間の金屏風の前に雛の段飾りが二対展示されている。天井から「さげもん」が端から端まで吊るされていて、華やかな雛飾りを一層華やかにしている。柳川伝統の七色の糸で巻いた大小の鞠と縁起のよい鶴、兎、宝袋など手縫いの小さな縫いぐるみは、見ていて温かな気持ちになる。部屋から庭園の松や池の鴨が見える。仙台藩から輿入れされた姫のために故郷の松島を模したといわれる庭の松は約二八〇本、古木の手入れが大変だろうが、見応え十分である。

一部屋に立花落の雛飾り

由紀子

「さげもん」を見上げ雛の顔を見ず

由紀子



西洋館も一巡りして「御花」から出る。近くには鰻屋や土産店など堀を挟んで建ち並んでいる。どの店内にも「さげもん」が吊るされ、堀の中にも小さな雛壇が飾られている。一段と大きく太った雛が飾っているが、これが夜になると点灯されるランタン雛なのであろう。昼間見ると風情に欠ける。少し堀からはずれた所に北原白秋の生家がある。江戸時代に藩御用達の海産物問屋として栄え、白秋が生れた頃は造り酒屋となっていた旧家である。なまこ壁の生家には入らず外観のみ見学。堀沿いの道に戻り、有明海で採れた魚貝類が売られている店など見て回る。「白秋の散歩道」方

面を散策した節子さん、真理子さん達と合流する。

ことさらに小さき道具雛の市

聖子

店先に浅蛸の袋積み寄せて

由紀子

芽柳に佇てば三味の音いずこかに

佳与子

ひもすがらゆく舟ながめお雛さま

真理子

帰りはタクシーにて西鉄柳川駅近くの珈琲店へ。十句の句会。駅の売店で美味しそうな蒲鉾など土産に買って特急電車に乗る。それぞれに降りて解散。





【川下り船乗場と川下り風景】



【伝統魚法の「四手網」】



【掘割沿いの並倉】



【掘割の飾り雛】



【ちょっと太めのランタン雛】



【「御花」の飾り雛】



【床の間の「さげもん」】



【人形店への通路】

第五十四回吟行記

平成二十一年四月六日(月)

参加者 佳与子 節子 真理子 由紀子

南蔵院(糟屋郡篠栗町)

今年の桜の開花宣言は三月十三日。福岡市が日本で一番早かった。例年開花宣言からおよそ一週間で満開なので三月二十日頃が見頃となるはずだったが、宣言後の気温が上らない。標本木の開花が早すぎたせいもあるが、冬に戻ったような十度前後の気温に、桜も人間も身震いをしてしまった。

開花している木もあるが、全くほころんでもいない木も多い。ようやく三月末になって、福岡のあちこちで満開の便りが聞かれるようになったが、いっになく各地ばらばらである。

今月は昇先生の地域文化功労賞受賞祝賀会を十二日に控えているので、月始めの皆の都合のよい日に吟行句会をすることになった。節子さんが調整・お世話役となり六日に決定。吟行地は去年の五月訪れた篠栗四国霊場八十八ヶ所総本山の南蔵院。巨大寝釈迦像で名を馳せている篠栗の一番札所である。山の中なので新緑の美しさは格別だと思いが、桜は散ってしまっ



ただろうか、石楠花は咲いているだろうと思いつつ「福北ゆたか線」に乗って城戸南蔵院駅に降り立つ。この日は暑くもなく寒くもない春の風が吹き渡っている。初めての佳与子さんに鉄琴のバチで叩きながら渡る「メロディー橋」の説明をしながら南蔵院まで行く。

石楠花を咲かせ一番札所かな

節子

山寺の案内板にも春の蠅

佳与子

花冷えのおかげで入口の桜はまだ美しく残っており、風が吹くたびに花片が舞い散る。入り口から続く坂道や横を流れる川には花屑が片寄せられ、本堂から大きな不動明王像までの道には石楠花やキブシの花が咲いている。その上にも桜の花びらが降り、また空へと舞い上がっていく。木には名札のつけられたものもあるが、名前のわからないものも多い。花木の名前をいいながら、また何の花だろうかと言いながら、脇に祀られている地藏に手を合わせて上



蔵に手を合わせて上っていく。山の上を見上げれば竹林が美しい。巨大不動明王像のある広場から細い階段を上れば滝が音をたてて流れ落ちていく。回りには古くからの不動明王の像など

が何体も祀られている。岩場には鎖を持ちながら上る所や岩のトンネルを潜ったり、健脚でないといけないところもあるが、岩場にある多くの羅漢像の前の籠には一円や五円のお賽銭が置かれている。至る所にある名前入りの羅漢さまには驚く。

目の前に花びらの吹き上がり来る 節子

賽銭の籠に米粒花屑も 真理子

鎖引き這い上る山竹の秋 真理子

賽銭の籠に降り込む花の片 由紀子



昼食を先に済ませることにする。去年と同じ「たまや」。もう一軒うどん屋兼土産店があるが、「たまや」の精進弁当をいただく。

南蔵院は広く、その敷地内には招き猫像や大きな大黒さまや観音像など、大小いろいろな像が建てられている。「七福神トンネル」の中にも大きな「七福神」が祀られている。その中を抜けていく。両側に名前の書かれた「仲良し地蔵銅板」がびっしりと貼られている。その数もまた数知れない。トンネルを抜けると



広場になっており、虹鱒の池がり、大きな藪椿の木や石楠花が咲いている。茶店横のスロープを進み、階段を上るとさらに広いコンクリートの広場に「さば大師」像、その先に、初めての人には驚くほど巨大な寝釈迦像がある。人が前に立つとその大きさがわかる。山の中腹にある広場からは駅や道路、回りの緑の山々がよく見え気持ちがいい。

寝仏の足ふくよかに春風に 節子



仏足の横ではお守りやお札が売られている。店先に何人か人が並び、何か投げている。見ると「俵投げみくじ」とかで穴に入ると有難い商品がいただけるようだ。俗っぽい話になるが、ここの住職が一億円ものジャンボ宝くじや高額宝くじが何度かあつたらしく、それでこの寝釈迦像を建てたと嘘か真か判らぬような

話を聞いてはいたが、本当らしくその記念碑まであった。ひっそりと札所を回ることもよし、あれもこれもありの少し俗っぽい霊山を回ることもよし、人それぞれ思いあつての札所巡り。寄進の像の多さに驚きもするが、楽しく札所巡りをするのもいいのかと思わせる南蔵院である。

「七福神トンネル」近くの階段を上ると四阿があるので、そこでしばらく句作。三極の花や石楠花に囲まれ、遠くに山々が見える。遍路姿の一行がトンネルを抜けて行く。水御籤を引いてみる。並べられている御籤紙を一枚取り、小さな池に浮かべると文字が浮かびあがってくる。



山寺のここにも手摺桜散る

佳与子

轉りや四阿山の中腹に

由紀子

水に浮く御籤大吉花筏

由紀子

水占の文字にさざ波風光る

真理子

茶店で「ぜんざい」をいただいて十句の句会。桜と石楠花の花の札所を詠むことのできた吟行となった。



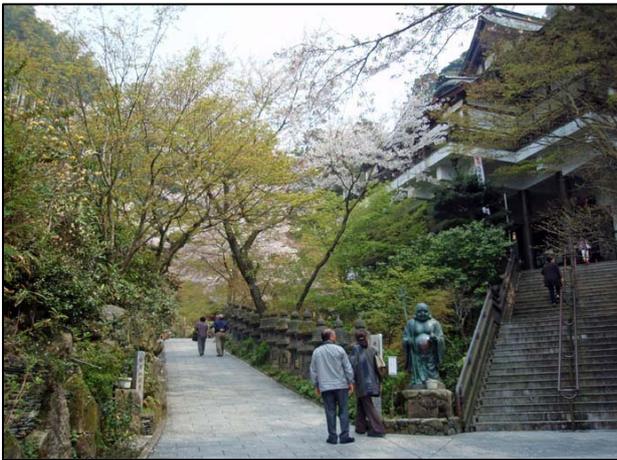
【篠栗南蔵院の名物・涅槃像】



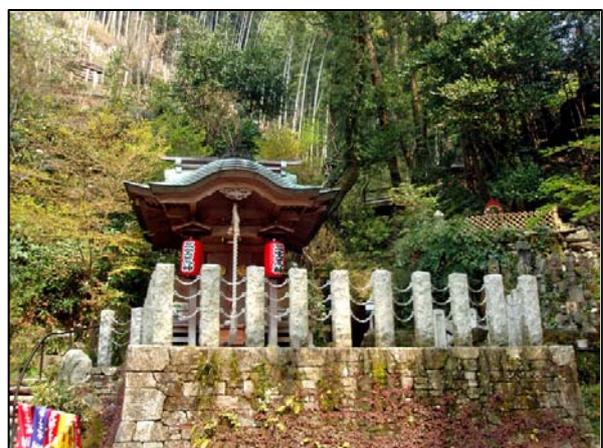
【メロディー橋】

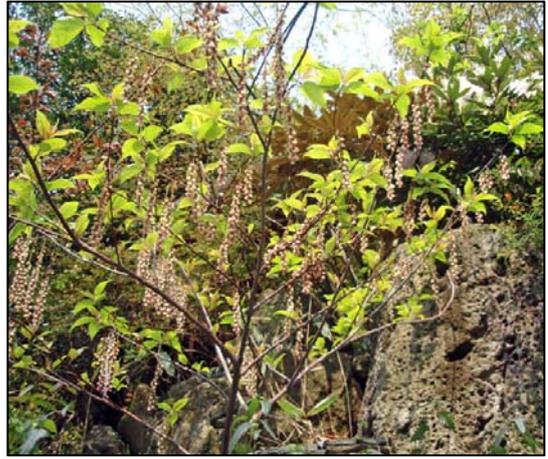


【南蔵院・入り口】



【南蔵院の境内】





【境内の草木】



第五十五回吟行記

平成二十一年五月十六日（土）

参加者 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

川渡り神幸祭（田川市）

筑豊の田川といえばかつて炭鉱で栄えた町だが、六十年代鉱山が閉鎖されて以来、高齢化と過疎化が進んでいる。象徴であったボタ山もほとんど崩され、かろうじて残っているものは草木に覆われて小高い山にしか見えない。衰退するばかりの田川市が、年に一度多くの人を集めテレビや新聞のニュースに載る。それが四百年以上続く風治八幡宮の「川渡り神幸祭」。毎年五月の第三土・日曜日に開催される祭りで、彦山川の対岸にある「お



旅所」へ山笠（山車）を引き連れた神輿が一夜泊まり、次の日また宮へと戻る川渡りの神事である。一五六〇年伊田村に疫病が流行し、悪疫退散を村の氏神である八幡宮に祈願し、成就のお礼として奉納されたのが始まりとされる。

五月十六日曇り。佳与子さん、由紀子は西小倉駅で待ち合わせ、小倉駅から先にJR日田彦山線に乗り込んでいる光子さんと合流し、田川伊田駅に向う。二両編成のディーゼル車は、小倉の街を抜けると緑の濃い山の中を通り、やがて山裾に黄金色の麦畑が広がる筑豊の町に入っていく。節子さん、真理子さんの博多組は何度か乗り換えがあったようだが、北九州組よ

り早く到着して駅で待っている。駅舎には祭りのポスター、通りには注連縄、リュックを背負った熟年グループやギャル風な娘たちが駅から町中へと歩いていく。

駅名は「採銅所」とや山若葉

由紀子

麦秋や無人駅より客二人

佳与子

炭鉱の町でありしや麦の秋

光子

ペンキやや剥げし駅舎に祭客

光子

駅前が始まる祭川渡り

節子

乗り継ぎて来し川の町祭前

真理子



有難いことに、早く着いた節子さんたちが食事処を決めている。入った「お好み焼きや」には、数人の客がビールを飲みながら大きな声で話している。関西訛りから察すると、露天商人かもしれない。すつたもんだ言いながら昼食を済ませ、神幸祭（じんこうさい）の神輿のある風治八幡宮へと向う。設営されたテントに祭り法被の男衆が大勢集まっている。十二時から「例大祭」



という神事が執り行なわれるらしい。禰宜や巫女が本宮前に並び太鼓が響く。厳かにお祓いが済むと、境内の見物客は散り散りに八幡宮から下りていく。プログラムをみると神輿の出発は十四時。時間があるので八幡宮の階段を下りると、通りに山笠が鉦や太鼓をとどろかせながら曳き回されている。一基に法被姿の男衆たちは二十人近くいるだろうか。それぞれに役があるようで、褌を掛けている。山笠の屋根に立ち上がって揺すりに揺すって威勢良く曳き回す。法被姿のモヒカン刈りや剃り込みの男衆を見ると、ここは川筋の町だと実感する。

町中を山笠十基練り歩き

節子

山車十基通りし後の紙吹雪

由紀子

川筋の町に地車荒々と

由紀子

地車の通りし跡の紙吹雪

光子

祭露地裏に上方香具師らしく

真理子

川渡りの神事のある会場へと行く。

彦山川に沿って露店が並び、河川敷には特設ステージが設けられている。堰が作られているので対岸に渡ってみる。堰には隙間のないくらいカメラの三脚が据えられている。本番前の会場は見物客は多くないが、露店の前を若者達がぶらぶら歩いている。

特設ステージの裏手に鳥居が建ち、奥に質素だが比較的大きな神社がある。砂利を敷詰めた境内に入ると神社らしき建物だが、がらんとして何もない。これが「御旅所」だと知る。



川堰の土囊一段神幸祭

佳与子

対岸のお旅所マイクテスト中

佳与子

彦山の水堰きありし祭川

真理子



十四時の神輿の出発も見てみたいが、なかなか訪れることのない田川の町なので、川渡りの神事の時間まで彦山川に沿って歩き、「道成寺」を拝観することにする。新緑に囲まれた境内は祭りの河川敷での大音響の音楽もほとんど聞こえず、時折鳥の音が聞こえるのみである。奥に「小督の墓」があると案内板にある。寺伝などによると、平安時代高倉天皇の寵愛を受けた小督が天皇の義父にあたる清盛を怖れて身を隠し、最後に大宰府の観世音寺の血縁の僧を頼って九州に向かい、途中この道成寺に逗留したが、旅の疲れからこの地で世を去ったとある。

香春岳見えて御旅所川向かふ 真理子
 御旅所の裏手にお化け屋敷かな 由紀子
 神輿待つ対岸すでに賑わいて 節子
 駐車場にはか茶店に祭町 光子



はセメント会社が石灰の採掘を続けてきたので山の天辺が直線に切り取られていて、この山以外には、どこにでもある山間の風景だ。空はどんよりと雲り少し肌寒い。青葦の伸び始めた川原をツバメが飛び交っている。

寺のすぐ下を子供山笠が練り歩いている。また川沿いを歩いて会場に向う。正面に香春岳（かわらだけ）が見える。五木寛之の「青春の門」の書き始めの香春岳である。昔から銅の採掘が行なわれ、昭和に入ってから

山寺に山椒喰か青葉闇 真理子
 山寺に小督の墓も山法師 真理子
 筑豊に小督の墓や花樽 由紀子
 新緑を映して底の見えぬ池 由紀子



新緑に肌をあらはに香春岳

光子

錆色の瓦に鉾山の梅雨兆す

真理子

鉄橋の上へ下へとつばくらめ

由紀子

青蘆や線路に柵もしてをらず

光子

会場は先ほどより随分人が集まっている。川の中へ入る坂の下りきった辺りが空いているので陣取ると、すぐに奉納の獅子舞があるらしく俄かに人が動き出す。風治八幡宮から出発した神輿の大小二台が到着する。いよいよ川渡りが始まる。陣取った所が良く、目の前を神輿が川の中に入って行く。堰の辺りまで進んだ後に特設ステージの川の中に据えられる。神輿に続いて次々に山笠が川の中に入っていく。通りで見物した山笠に馬廉（バレン）という

飾りをつけ、一段と華やかになっている。川に入る前も入ってから山笠を威勢よく揺らし、鉦太鼓をとどろかせ、男衆の掛声や笛が鳴る。川面にはちぎれた馬廉や紙吹雪が浮かんでいる。降りだした雨は山笠の迫力に押されたか止んでしまう。

先導の祭獅子とや荒々し

佳与子

魚跳ねる川へ祭の始まりし

節子

金色の神輿先頭川渡し

節子

川渡る神輿清めの雨の降る

由紀子

川中に神輿舁き入れしぶき上ぐ

光子

神幸祭一番やまは鉄砲町

節子

傾ける山笠に舁き手に川しぶき

佳与子

川渡りいよいよ険し祭笛

真理子

荒れ狂ふ山車のがぶりに馬廉散る

光子

川渡る五番山笠まで見ることに

佳与子



疎化が進む町での勇壮な祭だけに人集め、統制の取り方など色々な問題があるかもしれない。怪我のないように、また神事としての祭を大切に守り続けてほしいと思う。山笠の通り過ぎた通りに散っていた紙吹雪を拾い集めて掃除をしていた若者達の姿に温かいものを感じ田川の町を後にする。

十基すべてが川の中に入り、氣勢をあげて水を掛け合ったり、神輿が御旅所に入るところなど、まだまだ祭は夜にかけて続くのだが、句会時間や帰宅時間を考えて途中で会場を離れる。駅前の喫茶店らしき店で十句の句会。帰りの電車の時間を気にしながらの句会だったが、祭りの迫りに皆満足。「黒いダイヤ」という羊羹をお土産に博多方面、北九州方面と分かれて解散。

神輿二台と山笠十基の昇き手だけでも二百人以上の若者が要る。過





【風治八幡宮・本殿】



【田川伊田駅前】



【本殿前の神輿】



【川を堰きとめた祭会場全景】



【子供山笠】



【山笠・神輿の川入り】





【川渡り神幸祭のクライマックス】



【夜の山笠風景】

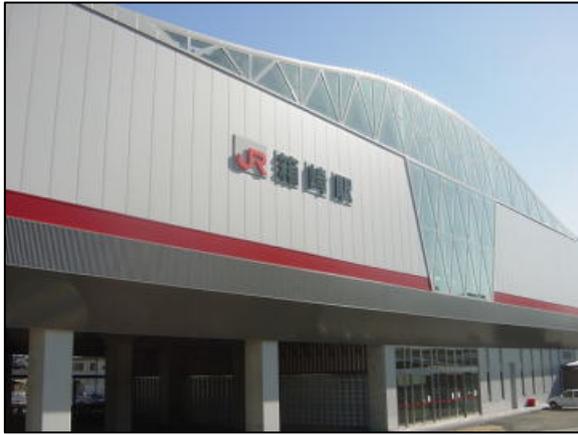
第五十六回吟行記

平成二十一年六月十二日（金）

参加者 佳与子 節子 真理子 由紀子

箱崎の紫陽花と菩提樹の花（福岡市東区）

梅雨入り宣言後、北部九州はほとんど雨が降らず暑い日が続いている。今月はどこに吟行に行こうかと色々考えたが、六月はやっぱり花菖蒲や紫陽花を見ながらの吟行地に落ち着く。どこか初めての場所で花を楽しめるところはないかと地図を広げてみる。新幹線で行く山口、特急利用の別府なども検討してみたが、目的地までに時間がかかりすぎる。いつも良きアドバイスをしてくれる節子さんに相談すると、箱崎宮の「紫陽花まつり」が開催中で、しかも近くに菩提樹の寺があると知らせてくれる。さっそく吟行地に決定。



六月十二日（金）。曇り空だが雨は降りそうになく暑い一日になりそうだ。佳与子さんと箱崎駅に降り立つ。高架の駅になるまでは、箱崎駅の前が箱崎宮の裏参道だったのだが、新駅になってから少しばかり遠い。途中珍しい鉢植えの花を見つけ一花摘まみ宮へと急ぐ。（後で銀梅花と知る）境内の絵馬堂に十時三十分集合。節子さん、真理子さんが待っている。ご実家が箱崎の節子さん。絵馬堂に節子さんのお父さんの名前を見つける。

父君の名の掲げある梅雨の堂 真理子

本殿裏横に「紫陽花まつり」の旗が掲げられ、「紫陽花園」への入口がある。何度も来ている箱崎宮なのに、この入口に覚えがない。この辺りは楠などの大樹が枝を伸ばし昼間でも薄暗く、いつも足早に素通りしていたのだろう。「紫陽花園」の入口には鉢植えの紫陽花が美しく並べられている。中に入ると人の背丈より少し低いくらいの紫陽花の花が一面に広がっている。広さと色鮮やかさに驚く。パンフレットには、開園期間は六月の一ヶ月のみで、約一七〇〇坪の敷地に約三五〇〇株の紫陽花と書かれている。



給水のホース四葩に巡らして

節子

株ごとに括る紫陽花花まつり

由紀子

一株の墨田の花火という四葩

節子

母と来しあじさい園の四阿へ

真理子



青にピンクに白にと色とりどりの紫陽花の径を一巡りする。赤に近い濃ピンクの紫陽花が一際輝いて見える。紫陽花に囲まれた休憩所は、入替り立代りして誰か座っている。しばらく紫陽花を眺め、にわか仕立ての茶店に入り梅が枝餅で一服。十分紫陽花を観賞した後、食事処「梅嘉」へ向う。



ここは江戸時代の終わり頃仕出屋として創業し、現在は五代目。ランチメニューはひとつのみだが、とにかく安く美味い。特に「がめ煮」は絶品である。

近くに鯨塚があるという。公園のような網屋天神の境内に、少し上部が欠け、文字も薄くなった墓標がひっそりと建っている。小学生が先生と一緒に社会勉強なのか、鯨塚の前で何かメモをとっている。明治二十一年博多湾を回遊していた鯨を捕獲し、その鯨の霊を弔うために塚を立てたらしい。また「おきうと」の店もあるというので覗いてみる。博多の朝は「おきうと」ではじまるというほど親しまれていたものだが、最近は食生活の変化で店も少なくなっている。店内に誰もいないので声をかけずに店を離れるが、「トコロテンあります」の旗に、味の濃いおきうとを買う人が少なくなったことをさらに実感する。おきうとの原料はエゴノリ、似ているトコロテンは天草が原料である。



南風吹く昔は海でありし町

佳与子

箱崎に鯨の墓標額の花

佳与子

鯨塚といふもの梅雨の網屋町

真理子

町中の鯨の墓標草茂る

由紀子

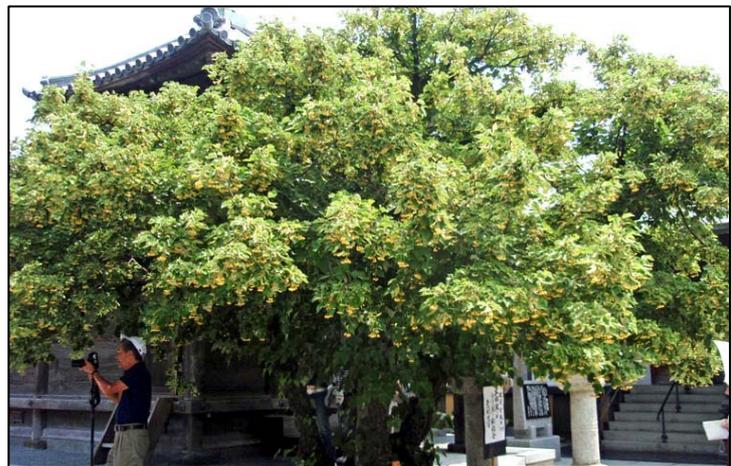
おきうとの梅雨の店先開け放ち

真理子

濃あじさいおきうとを売る店先に

節子

箱崎の「きんしゃい通り」商店街を抜けて行く。昔から管崎宮の門前町として箱崎千軒と呼ばれるほど賑わい、呉服屋や造り酒屋が建ち並び人馬が行き交った箱崎。戦後の復興も目覚しく昭和四〇年代ごろまでは福岡有数の商店街だったようだが、西鉄電車廃線での流れが変わり、商店も郊外型の大型店舗に押され、昔のような賑わいはない。それでも所々に昔ながらの青果店や魚屋が軒を連ね、格子窓の家や細い路地がある。今



の福岡市にまだこんな商店街が残っているとは発見である。

管崎宮の近くに恵光院（えこういん）という寺がある。千利休が豊臣秀吉を招いて茶会を開いたという寺で、管崎宮の社坊である座主坊の末寺とある。大きくはない寺の境内に菩提樹の大樹がある。その花が満開。境内に敷きつめられた小さな砂利に花が零れ落ちている。どちらかというと地味な花だが、枝を広げた菩提樹の下にいと甘い香が漂ってくる。煩惱ばかりが渦巻く頭にやさしい匂いは気持ちが良い。寺から出された冷たい麦茶に一息つき寺を後にする。

菩提樹の枝を広げて寺の梅雨

節子

うつむいて菩提樹の花静かなり

節子

菩提樹のかおり籠もれる梅雨の寺

真理子

梅雨晴れの菩提樹の花ぼろぼろと

節子



恵光院から菅崎宮の参道を浜の方に句かつてまっすぐ歩いて行く。浜は山笠のお汐井取りの浜である。国道三号線を渡ると、松林の間に赤い鳥居のある浜が見える。神事の行なわれる浜を汚さないためか鉄格子の門があり中に入れない。残念だが仕方ない。

参道は浜まで続き楠若葉

由紀子

楠若葉一の鳥居の遠く見え

由紀子

街路樹の等間隔の片陰を

佳与子

近くの福岡リーセントホテルにて十句の句会。真理子さんは地下鉄「菅崎宮前」駅より家路へ。他三名は箱崎から馬出（まいだし）の商店街へと抜けて吉塚駅へ向う。大通りから一歩中に入ると、狭く電信柱の立つ通り



に走る車が多く、人や自転車は車を避けながら通っている。町並みは小さな商店と高層マンションが混在している。去年できたというパン屋はレトロ調の建物。次から次にお客が入っていく。クロワッサンやクルミパンなど種類も多く、美味しい匂いをさせている。昭和初期風な建物は商店街にしつくり馴染み、懐かしさを感じさせる。

その先に「博多曲物」（まげもの）の看板を見つける。店内は狭いが、伝統工芸の檜のお膳やお重が並べられている。祝い事に使われるものだが、棚に積んでいる商品に埃がうつすらかかっている。伝統工芸といえども継承させるのは難しいかもしれない。

これからまだまだ変貌していきそうな箱崎の町。暮らしやすい街になってもらいたいと思いつつ吉塚駅に着き解散。それにしてもよく歩いたな！



【紫陽花園・その二】



【紫陽花園・その二】



【紫陽花園その三】



【宮崎宮「一の鳥居」】



【菩提樹の花】



【恵光院】



【箱崎の路地】



第五十七回吟行記 平成二十一年七月十四・十五日(火・木)

博多祇園山笠 (福岡市博多区)

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 由紀子

法被に締め込み姿の男衆が目の前を歩いて行く。「流れ」が書かれた法被の背はピンと伸びている。七月十四日午後の博多の繁華街・中州川端界隈は、この法被姿の男衆が「流昇き」にあわせて次々に集まってくる。お尻や太股を露にした締め込み姿が行き交う通りは、大勢の見物人も混じって祭り一色。これから二週間にわたる博多山笠のフィナーレ「追い山笠」に向けての山笠が動き始める。

追い山笠を明日といふ日の博多へと 佳与子



七月十四日十六時、櫛田神社近くの旅館「鹿島本館」に集合。二月の櫛田神社節分吟行時に予約を入れた宿は、今年も追い山笠中継を行なう九州朝日放送関係者の詰所になっている。一階の大広間は会議室、小部屋は締め込み室などの張り紙がされ、一般客は二階に泊まるようになっていく。部屋に荷物を置き、先ず



櫛田神社にお参りに行く。参拝者や祭り関係者が入替り立代りしているが、この時間はまだ混雑というほどではない。参拝後境内の追い山笠会場に棧敷席の後ろから入ってみると、ちょうど清道旗の上に付ける笹を取り替え中。それをぐるりと囲むようにテレビクルー達も良いようにビニールや藁で覆われている。櫛田神社のシンボルといふべき大銀杏の横にも櫓が生まれ、ここでは大太鼓が取り付けられている。本番を待つ神社の準備が着々と進んでいる。

山笠を見る宿は櫛田の神社前 由紀子

やぐら組む大型カメラ山笠を待つ 節子

清道旗笹も新たに雲の峰 光子

竿撓ひたる清道旗夏空へ 佳与子

追い山笠の刻待つばかり清道旗 光子

大夏木櫓太鼓の組まれけり

佳与子

修理せし祭太鼓を櫓へと

光子

追山笠を告げる太鼓を櫓へと

光子



毎年棧敷席券は売り出し十分後には完売するプラチナチケット。棧敷席の入口付近にビニールシートを敷いて座っている女性がいる。棧敷席券を持っているが、券は指定席ではないので良い席に座るために待っているという。まだ開始十二時間前。

追い山笠がこれほど人気を集めるようになったのは何時頃からだろうか。数百年以上の歴史がある博多山笠は昔から「山のぼせ」という言葉もある程だから、祭り参加者の博多っ子を一番熱くする祭りであることは間違いないが、いつからか各放送局が実況放送し、山笠の歴史や見所を詳しく説明している。それも年々熱を帯びていく。

役職の札貼り出され祭路地

佳与子

手のごいと博多ではいふ祭かな

佳与子

少年のきびきび動く祭小屋

由紀子

夜中から早朝にかけてぎっしり人で埋まる境内をしばらく眺め、「流昇き」の行なわれている通りへと向う。「流昇き」は、各町内を昇き山笠が駆け巡る。今年は昇き始めに必ず行なう「博多祝い歌」と「博多手一本」が入る所を見ることができなかつたが、あちこちから聞こえる「オイッサオイッサ」の声に祭好きな心が躍る。
約一トンもの山笠を二十六〜二十八人の男衆が昇き上げて走る。昇き手要





員は替わるタイミングを見計らいながら次々に替わっていく。山笠は常に動いている。

すでに勢い水の撒かれている通りから上川端商店街を抜ける。「土居流」「西流」の昇き山笠やアーケードに据えられた「走る飾り山笠」を見物し、那珂川沿いの博多人形店に立ち寄りたりしながら博多座裏の食事処「吉一」にたどり着く。ここで聖子さんと合流。通された二階の部屋の窓から流昇きが見える。女将さんは粹で美しい博多女の見本のような人で、料理もビールも美味しい。宿に戻って十句の句会。

明日は午前三時起床。早く寝ようと句会後すぐにお風呂で汗を流して部屋に戻ると、鍵が開かない。宿の人に開けてもらおうが開かない。仕方なく部屋替えとなる。鍵の開くのを待ち、置いていた荷物を手にしたのは午後十一時すぎ。このドタバタ騒ぎですっかり眠気が去り、なかなか寝つけない。(由紀子のみ熟睡らしい)

睡眠不足の頭で三時半に神

社の前に行くと、すでに大勢の人達が神社を取り巻くように集まっている。真つ暗な空に煌々と照らされた境内。道路は法被姿の男衆や警備の人、放送関係者や見物席を探している人が行き交っている。「櫛田入り」のよく見える歩道は見物人で埋まっている。前回見物した正面鳥居前の道路にも三〜四列座り込んでいるが、ここが一番余裕がありそうなので陣取ると、後ろからぐいぐい押されて危ない。座って待つことにする。時間が経

つほどに割り込もうとする人や通り抜けようとする人がいる。横に座る男性は誰も通らせないように声を荒げ、辺りは殺気立った雰囲気。眠たいどころではない。四時を過ぎる頃には全く身動きできないほどの人出となるが、風が出てきて用意した扇子を使うことなく過ごせたのは有難い。

追い山笠の開始十分前の案内放送がされると、今年の一山笠「東流」の子供達を先頭に男衆が境内に入り始める。座っていた人が立ち上がり始め、清道旗のある境内が見えない。七基の昇き山笠と上川端の「走る飾り山笠」の合計八基の山笠も神社脇から冷泉公園前にかけて待機しているはずだが、人の頭で見えない。かろうじて列をなしていく男衆の姿が人の間から見える。五分、三分、一分とアナウンスされる度に静かになっていく。



それは緊張感のある静けさで、指揮者がタクトを振り上げた瞬間と同じ。五・四・三・二・ドーンと太鼓の音と共に追い山笠の幕が開く。午前四時五十九分。「櫛田入り」が始まる。

追い山笠の昂ぶる静寂五秒前

由紀子



拍手が、二番山笠、三番山笠と続く「櫛田入り」の度に沸きあがる。今年も櫛田入りを最後まで見ずに、「廻り止め」まで走る山笠を追いか

張り詰めていたものが

一気に動き出す。地鳴り

のような「ヤッー」とい

う掛けと共に昇き山笠が

走り、ぴたっと止まる。

静けさの中に一番山笠の

みに許される博多祝い唄

(祝い目出度)が聞こえ

てくる。唄い終えたとす

ぐにまた山笠が走り出す。

タイムの放送と歓声。山

笠が清道旗を回って境内

を出るまでを「櫛田入り」

と呼ぶのだが、そのタイ

ムを競う。一秒でも早く

走り抜けることに誇りを

かける。歓声と溜め息と

けることにする。山笠は境内を出た後、「東長寺」「承天寺」前の清道旗を廻り、狭い路地や大通りを走り抜け「廻り止め」まで五キロのコースを走る。一トンもの山笠を次々に昇き手を交代させながら走るタイムレースは、真剣でなければ怪我人がでる。

役割分担され統制のとれた昇き手集団は必死の形相で走る。昇き手を叱咤激励し指揮する「台上がり」も交替する。前後三人づつの「台上がり」は、いつの間にか前後一人になっている。「招き板」を持って走る子供。幼子を抱えて走る父親らしき男。皆ひたすらに走っている。



招き板立てて山笠先走り

光子

昇山笠の台上がりまた交替し

光子

一瞬に昇き手交替山笠走る

佳与子

見物客も走る。追い山笠のコースが書かれた地図を見ながら路地を抜け、大通りを抜ける。昇き山笠の通る道には必ず大きな桶やバケツが置かれている。「勢い水」と呼ばれる山笠に無くてはならぬ水。山笠を濡らし昇き手を濡らす水は安全に山笠を走らせる重要なもの。水をかける男衆もいる。沿道から水をかける地元の女性もいる。それぞれがそれぞれの役目を果たしている。

昇山笠を追いかけ走る人を追ふ

節子

大樽に水溢れさせ山笠を待つ

節子

勢い水かける祭りの人となり

由紀子

この路地も勢い水あと祭町

佳与子

ゴールの「廻り止め」に着く。ここにも多くの報道関係者と見物客が押しかけている。山笠がゴールする度にタイムがアナウンスされ、紙に張り出される。大きな拍手が湧き起こる中、昇き手は疲れてはいるが安堵の表情を浮かべ、大通りより全員揃って自分達の地区に戻る。



空はすっかり明るくなり、交通規制も解除されて、いつもの街に戻っていく。

山笠はもう一度各地区でそれぞれ昇き廻り、すぐに解体される。夜を徹して走った街は祭提灯のみが残され、榎田神社の能舞台では「鎮め能」が静かに行なわれている。追い山笠が終わり、今年の博多山笠が終わる。



追い山笠の前夜眠らぬ人の群れ

聖子

解きかけの露店にも客山笠の朝

聖子

山笠果てし飾り直ちに解かれけり

佳与子

あかつきに山笠解かれ博多かな

光子



飾り山夜明け前には解くという

節子

鎮め能明けゆく空に祭果つ

由紀子

昇き山笠を追いかけた体を宿で休める。男衆の必死な表情と汗、真剣勝負の緊迫感、統制のとれた集団のスピード感ある祭は、観客にとっても緊張とその後の爽快さを共有することができる。見終えた達成感と早朝から走り回った疲れを残して宿をチェックアウトし、また見るために足腰を鍛えておかねばと言いながら博多駅へと向い解散する。(真理子さんは愛大の病気のため急遽欠席)

【「追い山」終了後の直会】



【山笠を待つ東長寺の住職】



【「追い山」の風景】





【「追い山」終了後の風景】



【鎮めの能】



第五十八回吟行記

平成二十一年八月七日(金)

参加者 佳与子 節子 真理子 由紀子

皿倉山 (北九州八幡東区)

八月の吟行地を決める時は、炎天下を避け涼しい場所を考える。「皿倉山」と聞いた時一瞬暑いのではと思ったが、考えてみれば歩いて登るわけではなく、ケーブルカーやスロープカーを使えば難なく頂上に着く。北九州に住んでいれば大体どこからでも見える皿倉山は、多くの市民が一年を通して自然を満喫できるようにイベントも多く、また交通手段も充実している。

例年になく遅い梅雨明け宣言後の八月七日、八幡駅に十時すぎ集合。佳与子さんのご主人・勝利さんの車で帆柱ケーブルの山麓駅まで行く。「七



夕祭り」最終日の駅舎には何組かの親子連れが、飾られている七夕飾りをカメラに収めたり、短冊に書いたりしている。二十分間隔で運行されているケーブルカーに乗り山頂に向う。天井までガラス張りになっている車輛は緑の濃い木々を分けるように急勾配を上っていく。下ってくるケーブルカーとすれ違う辺りから視界が開け、段々北九州の街全体が見えてくる。歓声をあげているとすぐに山上駅。ここからスロープカーに乗り換える。二〇〇七年末にリフトから替わったスロープカーは乗り場から車輛へ段差のないバリヤフリーになっており、座席も全席北向きで北九州のパノラマを楽しむことができる。以前のリフトはスリリングな乗り心地だったが、このスロープカーによって高齢者や車椅子の人など多くの人が山頂にいけるようになったのは喜ばしいことだ。スロープカーの到着場所そのまま展望室へと続き、エレベーターで屋上展望台に行くことができる。

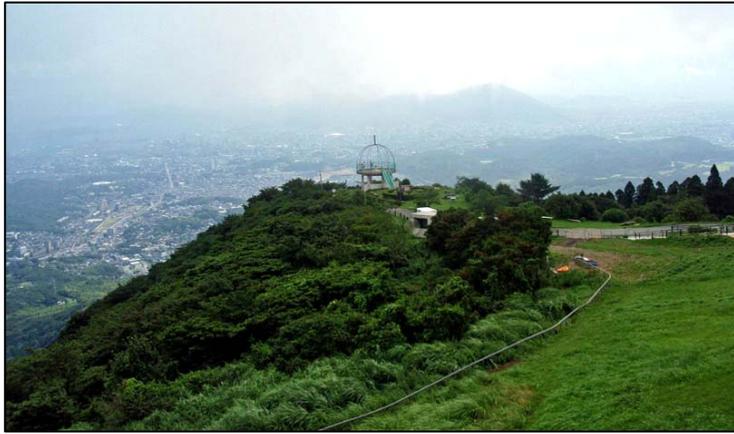
山頂の広場に立つと、雲か霧かが手の届くところに東南の山側から北西の海側へと流れている。白く霧がかかった景色の中にテレビ塔が何基も建ち並んでいる。暑いと思っていた山頂は涼しい風が吹き渡り、南側には福知山山系、東側には足立山山系の山々がうすうすと連なっている。展望室、白秋の歌碑、昆虫碑などを見ながら、少し下ったところにある「国見岩」



まで行くことにする。

夏空へ雲次々に溶けてゆき 節子

昆虫碑ありて山頂風涼し 由紀子



スカートの真理子さんには、ちょっと酷だったかもしれないが、木や草の覆う小道を下りていく。朝露か霧で濡れた急な小道は滑りやすい。それでも名前は知らないがひっそりと咲く小花に引き寄せられながら、下へ下へと下りて行く。萱らしき草の羽毛のようなヒゲに小さな露の玉が美しく、茂った草の中に咲くオレンジ色のノカンゾウが目にとまる。先頭の節子さんの「着いたよー」の声に元気をもらい国見岩まで辿り着く。足がすくむ程の絶壁に立つと、まさに眼下に豊前、筑前、遠くには本州まで見える。謂れは昔に遡るが、現在ロッククライミングの練習場になっている。

広場へ戻り、スロープカー発着場のある展望室へ向う。途中下の方へ続く一本のレールを見つめる。遊具なのか作業用なのかわからないと思っ

眺めていると、作業服の男三人の乗り込んだトロッコ箱がスーッと下りていく。山頂の作業にはうってつけのトロッコだが、さて下から上がる時はどうするのだろう。

名も知らぬ山の花なり霧じめり 佳与子

草スキーめくトロッコの茂りへと 真理子

夏霧のうすれ現れ英彦の峰 由紀子

半島の夏山移る雲の影 節子

夏霧の通り過ぎたる湿りかな 由紀子

展望室に行ってみる。階段も壁も濡れている。雲や霧がかかる度に水滴を残していくのだろう。スロープカーと同時に出来た展望室は広々として気持ちがいい。勝利さんが吟行日前に下見をして、展望室にレストランがあることを知らせてくれたので、弁当持参としていたが、ここで昼食。北九州の街を見下ろしながらの食事は格別である。レストランの入口付近に大きな木の根株が展示されている。昭和五十九年に台風によって倒さ





展望台からスロープカーに乗って
ケーブル山上駅まで戻る。このまま句
会も山の上でしようということにな
り、「皿倉山ビジターセンター」の休
憩室を使わせてもらう。ここは閉館し
た「山の上ホテル」の後をNPO法人
の帆柱自然公園愛護会が運営してい
て、この辺り一帯の動植物について何
でも知ることができるようになっ
ている。
休憩室は自然の風のみで少し暑い。
一人の熟年男性が、大きな声で若いア
ナウンサーらしき女性に鳥の渡りに

れた皇后杉の根株を掘り上げたものと説明にある。皿倉山の見るべきもの
のひとつ皇后杉林があるが、尾根続きの権現山付近にあるので、次回歩い
て登る時にじっくり見ることにする。
午前中の霧はすっかり消え、真つ青な空がどこまでも広がり、東を見れ
ば関門橋、正面には工場群とその先に風車と響灘、西を見れば遠賀川や中
間市まで見える。北九州を案内するには、まずこの皿倉山に上るのが一番
だと思えてくる。蝉の声に混じり鶯や相思鳥の鳴声も聞こえてくる。

八月の山守相思鳥鳴いて 真理子

鳴きやめばもう次の蝉鳴いてをり 節子

ついて話しているのが気になりはしたが、ゆっくり何の気兼ねもなく句
作・句会ができるのがありがたい。

午後よりは霧雨はれて下山かな 佳与子

山小屋に渡りの話秋立ちぬ 真理子

山上駅前の七夕笹に夕日が差している。午後4時にもなると客も少なく、
ケーブルカーの最前席に座り山麓駅へと下りていく。ここからすぐシヤト
ルバスが八幡駅まで出ているので乗車。途中佳与子さんが降車し、三人は
八幡駅からJRに乗り帰路につく。
のんびりと山頂からの絶景を楽しんだ一日となった。



【山麓駅舎内の七夕飾り】



【山頂付近の七夕飾り】



【アキカラマツ】



【霧に濡れた草々】



【黒崎方面を望む】



【山上駅】



【ケーブルカーとスロープカー】



【白秋の歌碑】



【山頂のテレビ塔】

第五十九回吟行記

平成二十一年九月四日(金)

参加者 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

到津の森公園(小倉北区)

今年の夏は梅雨明けが遅く、それ以降三十度を越す猛暑日はあるにはあったが、年々記録続きの気温の上昇は一段落し、八月を過ぎた頃から朝夕涼しく感じるようになった。酷暑を覚悟していたが、比較的凌ぎやすい夏だったといえよう。天候に敏感な鳥や動物たちにとって、今年の夏はどうだったのだろうか。今月の吟行は「到津の森公園」。動物園の生き物たちは、亜熱帯や熱帯地方の動物が多いので、暑さは気にならないかもしれない。

九月四日「到津の森公園」入口に十時半集合。バス停からエントランスのゆるやかな坂を上ると、佳与子さん、節子さんはすでに到着している。光子さんからは車を駐車場に止めて、こちらに向っていると連絡が入り、真理子さんからも八幡駅からバスに乗ったと連絡が入る。幾分涼しくなったとはいえ、日中の気温はまだ高い。二人とも汗を拭きながら到着。今回は正面の「南ゲート」から中に入る。さっそく「郷土の水辺」や「バードケージ」を抜けて「里のいきもの館」に入る。身近に棲む昆虫や爬虫類や両生類など



が展示されていて、工作や講義ができるようになってきている。シマヘビ、イモリ、カブトムシ、鈴虫などを間近にゆっくりみる。また、体感ジオラマコーナーがあり、生き物の生態をよく観察することができる。巨大なニシキヘビを見るより面白い。

入口近くに戻って「樹冠の世界」という樹上生活のサルや鳥たちがいるジャングルを再現しているコーナーを、展望デッキを通って見学する。キバタンは、時折目玉を動かすのみで置物のようにじっとしている。遠吠えをするフクロテナガザルも一度長々と声をだしたのみでおとなしい。襟巻きにしたらよさそうな尾を持つ猿、美しい羽をもつ鳥たち、バナナのような黄色の贅をしたチョコボールの「キョロちゃん」のモデルになったらしい鳥もいる。

「林床の世界」コーナーには象やトラ。真理子さんらが買った餌をそつと

差し出すと、象はそのりと動き上手に口に運ぶ。

象の眼に長きまつ毛の秋日濃し

真理子

象の鼻揺れて秋蝶ひらひらと

節子



児たちは整列を始め、帰っていった。

近くの園内レストランに入ると冷房が効いていてホッと一息つく。飲み物を注文し、持ってきたおにぎりやサンドイッチを頬張る。持ち込み禁止でもなさそうだが、少し気がひけるところもあって、募金箱に寄付金を入れ、レストランを出る。すぐ横にはプレイランドがあり、子供自動車やメリーゴーランドが二三組の親子を乗せて動いている。乗ってみると風に吹かれて気持ちよく、時間が短く感じられる。目の前に広がる芝生の大広場には、園児たちが遊んでいる。リュックを木の下に集め、思い思いに散らばって遊んでいる。やがて集合の笛がなり、園

園児らの去りし広場に群とんぼ

由紀子

目につかぬ園の動物秋暑し

佳与子



広場の隅っこにある樽から煙のようなものが噴出している。近づくると熱中症対策用のミスト。園児たちが時折近づいては楽しそうにしていたはずだ。広場からは、しま馬やキリン、フラミンゴが見える。ぐるっと回って「ふれあい動物園」に向う。ロバや猿、ヤギ、レッサーパンダなど子供達に人気の動物たちが柵の中にある。ロバはおとなしく体を洗ってもらっている。白ヤギ黒ヤギは岩山に上っているものもある。猿山の猿は外で遊ばず、岩穴の中に潜むようにしている。外にいる猿も日陰を選んでじっとし

ている。

さわやかや若き園丁ロバ洗ふ

真理子

しま馬の親子首寄す木陰かな

由紀子

猿の目の冷茶ボトルに注がれて

佳与子



少し日が傾き始め、そろそろ句会を考えねばならない。ゲートでもらった園内マップを見れば、エントランスに近い大通りに面した所に「子供ホ

ール」があり、その二階に無料休憩所がある。行ってみることにする。「子供ホール」の手前の「郷土の森林」を抜ければ園内を一周したことになる。森の中は「ぼんぼご庭」や「ムササビの森」「こもればの径」や「森の音楽堂」等など楽しそうな名前がついている。小高い丘をゆつくり散歩。タヌキが檻の中でうずくまっている。夜行性の動物だから邪魔をしないように通り過ぎる。坂を下りていくと野外音楽堂が見える。次の日は土曜日だからイベントがあるのかもしれない。舞台にはマ



イク一本が立っている。佳与子さん、光子さんは興味深々で舞台にあがってみる。音楽堂を見下ろす階段状の観客席は、楠だったか桜だったか忘れたが、大樹の枝で覆われ木漏れ日がやさしい。

こもればは径の名なりし秋の草

光子

片陰をたどりて森の音楽堂

真理子

露草や森の音楽堂も古り

光子

蝉時雨音楽堂は森の中

節子

園の関係者がいるので「子供ホール」が使えるかどうか尋ねると、「自由にお使いください」という返事。冷房も入れてくれるという。三階建てのホールは団体専用ゲートにつながり広々としている。ここに遠足に来た時、集合場所や昼食場所に使う所だろう。大画面の「旭山動物園モニター」が放映されている。テーブルと椅子が並べられた広い休憩室で十句の句会。

「到津動物園」時代より「到津の森公園」は動物の数は少ないが、緑が多

く大人のみで散策するのにも気持ちがいい。動物たちも残暑の午後をのんびりと過ごしている。影が長くなり風が涼しくなり始めた午後四時、園内で佳与子さんと別れ、三人は光子さんの車で八幡駅まで送ってもらい電車に乗る。



【園内広場や施設】



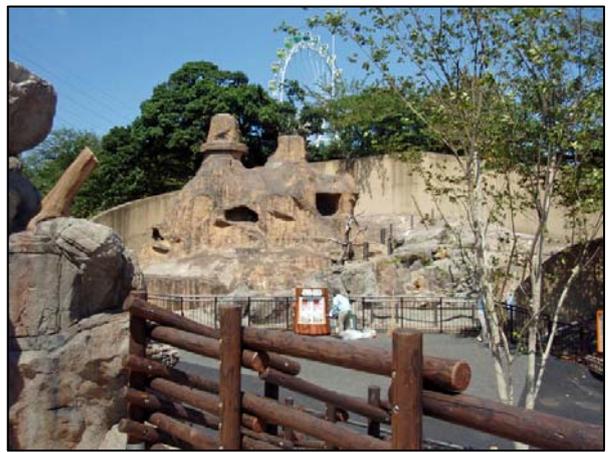
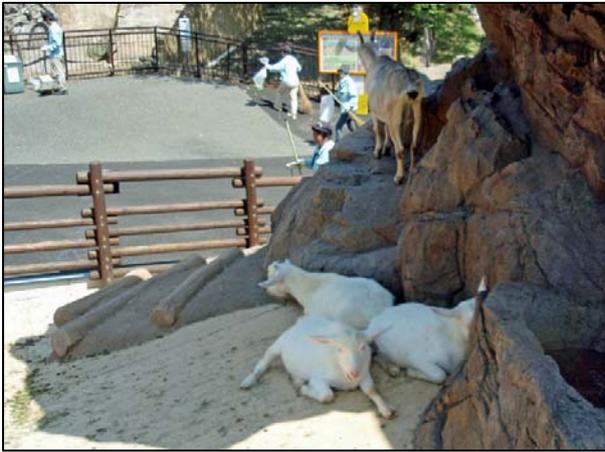
【オオサイチョウ】



【キバタン】



【園内風景：1】



【園内風景：2】



【園内風景：3】

第六十回 吟行記

平成二十一年十月七日（水）

参加者 佳与子 節子 由紀子

駕与丁公園（福岡県糟屋郡）

「駕与丁」を「かよいちよう」と読めるのは地元の人か訪れたことのある人だろう。聞き慣れない名前の公園に三年前初めて訪れた時、まづその広さに驚き、池の回りの桜の美しさに驚いた。公園といえば大濠公園や舞鶴公園を思い浮かべるが、設備の充実さは駕与丁公園が勝っている。福岡市の隣の粕屋町に広がるこの公園は、約三十ヘクタールの広大な敷地内に駕与丁池を中心にして遊歩道や池を渡る橋や野鳥の観察小屋などがあり、総



合体育館の「かすやドーム」や運動場を併設している。

今月の吟行は「駕与丁公園」の散策。十月七日（水）佳与子さんと由紀子は、いつものように折尾駅で合流し香椎へ向う。香椎駅から香椎線宇美行きは二両電車に乗り込み、駅から六つ目の駅「酒殿」（さかど）で降りる。回りは色づき始めた稲田が広がり、駅舎というほどでもない小さな建物の中に駅員が一人いる全くのローカル駅で、切符は上り線下り線の両出入りに置かれた箱に入れるようになっていて。駅舎の前で節子さんが手をふっている。今日の参加メンバー三人が揃う。目の前の稲田の道を歩いて、稲田の途切れる国道沿いにある食事処に向う。食事にはまだたっぷり時間があるので、ゆっくり畦道に咲く露草やエノコロ草など見ながら散策する。所々にある畑にはブロッコリーや冬野菜の苗が植えられている。東南の方向には太宰府に続く山並みが連なっているが、稲田の近くに小高い山がポコンポコンと並んでいる。かつてのポタ山らしい。

改札を出れば稲田の続く道

佳与子

降りて来し駅まだ見える稲田径

由紀子

食事処の近くに小奇麗な倉庫が建っている。建物は新しく、農作業用の個人の倉庫にしては大きいので、興味深々で入口を探す。敷地内で何か作業をしている男性二人に佳与子さんが声をかけてみる。

どうやら酔の蔵らしく見学もできるらしい。普段は予約があるそうだが、佳与子さんの笑顔と美しい声でのお願いに快く蔵の中に入れてもらえる。

酢の蔵に行きあたりたる稲田径

由紀子

蔵一步入りし香りに酢を造る

由紀子



中に入ると木の香りがフワーツとわき立ち、試飲の部屋には酢の爽やかな香りが漂っている。数種類のお酢が並べられているが、試飲は「柿酢」のみ。まろやかな酸っぱさは健康に良さそうだ。ここでは販売はしておらずパンフレットを手渡される。福岡県の特産品の「富有柿」で造られた柿酢は歴史は浅いが、これから販売が伸びていきそうな気がする。二階の見学通路から下に置かれた柿酢の大樽を見下ろす。蓋を開けているものもある。麻布のようなもので覆われて熟成するのを待っているものもある。

窓からは明るい日が差し込み、酒蔵のようなほの暗さはない。案内を聞きながら一回りして蔵を後にする。「酢を造る」が十月の季節だと知り、思いがけない出会いに嬉しくなる。

食事処「かよい庵」の和洋折衷の創作料理をいただいた後、節子さんの車で駕与丁公園に向う。有難いことに行く道を何度か練習したという。パトカーが道路脇にひそんでいるのを横目で確認しながら注意深く運転。それにしても細い道だ。駐車場は薔薇園の側で、秋薔薇が美しく咲いている。一重、八重、白に黄色に赤と幾種類も植えられている。薔薇園を過ぎると、芝生広場があり、中央にある大きな風車がくるくると回っている。



コスモスにパトカー二台ひそみけり 佳与子
よく回る風車の広場秋薔薇 由紀子

台湾付近に停滞していた台風が日本の方へと向きを変えたようで、空は雲に覆われている。薄手の上着では肌寒い。朝よりも段々風が強まっている。広場から駕与丁池へと下りて行く。さざ波が立ち、木の葉が舞っている。時折散歩する人とすれ違うが人影はまばら。台風の影響なのか、それ

とも渡り鳥が飛来するには少し時期的に早かったのか、鳥の数も少ない。マイクのテスト中らしい放送の声のみが響きわたっている。池の周囲の桜葉が色づき始め、足元には団栗が転がっている。すっかり秋の様相の公園はもの淋しい。捨て猫なのか、何匹か池の辺に餌を探している。

秋風にのってマイクのテスト中 節子

秋風や湖にまで猫ついてくる 由紀子

のら猫に声かけてみる秋の風 節子

こおろぎの声自販機のどこからか 節子



「かすやドーム」の回りは石柱や水の流れを上手く取り入れた憩いの広場になっていて、鳥などのモニュメントが点在している。天気が良ければ座つてもみるが、強まる風に追い立てられるようにドームの中に入る。バスケットコートでは若者が数名練習している。窓から公園が見渡せる休憩所で句作。温かい飲み物がほしいが、自販機はまだ夏バージョン。冷たい珈琲ではあったが、休憩所は誰にも気兼ねなくゆつくり過ごせる空間。十句の句会。

ドームから駕与丁池に架かっている大橋を渡って駐車場へ向う。風はさらに強まっているが、雨が降らなくて一安心。酒殿駅まで送ってもらって解散。



【駕与丁池】



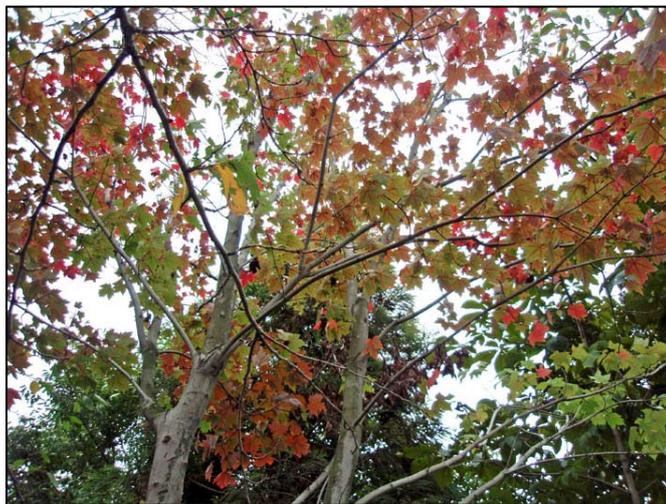
【公園付近の「柿酢」蔵と蔵の内部】



【公園内風景】



【かすやドーム】



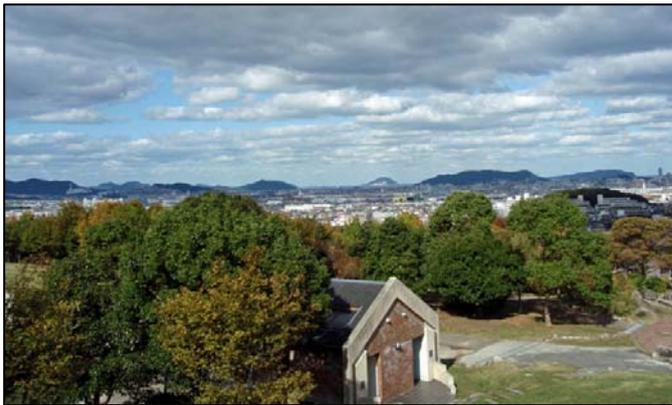
第六十一回吟行記

平成二十一年十一月十八日(金)

参加者 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

西油山・徳栄寺周辺(福岡市早良区)

晩秋の里山を歩くことに決まった。場所は真理子さんの自宅近く。昨年節子さんが出向いた折とても気に入って是非紹介したいという。福岡市の市街地は大方博多湾に沿って東西に伸び、北側に玄界灘が広がり、南側は住宅街やなかなか山が連なっている。その南西にある油山の麓に真理子さんは住んでいる。油山には観音堂や鷹の渡りを見に行ったが、西油山には一度も行ったことがない。



十一月十八日(金)曇り空に所々青空が見える。午前十時すぎ佳与子さんと光子さんと快速電車で南福岡駅に着く。節子さんが車で待っている。北九州吟行に真理子さんが参加する時など、自宅から博多駅まで行くのに時間がかかると聞いていたが、今回、電車、地下鉄、バスなど乗り継がなく、てよいように節子さんが車を用意してくれ有難い。南福岡駅から野多目を抜けて西油山へと向う。交通量の多い通りから山に向う細い道を上つていくと広い公園がある。そこに車を止めて公園の見晴らしのよい場所に行く。十数名ほどの熟年のグループが市街地を眺めている。ここからは福岡の街が一望でき、玄海島、能古島、志賀島も見える。反対側から真理子さんが手を振りながらやって来る。

復興の地震の島見え石路の花

由紀子



交通の便は良いとは言えないが、毎日市街地を見下ろしながらの生活もいいなと思う。真理子さんの案内で近くを散策する。ガラス工房はお休み。鳥の声とせせらぎの音が聞こえる。白壁の少し崩れかけた納屋のある家、軒先には吊し柿、庭の隅には小さな畑、今流行りの皇帝ダリアが咲いている。少し上れば段々畑が見えてくる。

市街地を見下ろす暮し年木積む

由紀子

里山のガラス工房蔦紅葉

節子

水音の絶えぬ山里笹鳴けり

佳与子

せせらぎの音高まり来ひたき来る

由紀子

啼く鳥に山家住まいや年木積む

光子

からすうり向こうに村の幼稚園

節子

「年木積む」に無縁の生活をしている者には、納屋の横にきっちり積まれた年木が珍しい。庭に干す柿の皮も畑の野菜も旬材。この声は何の鳥？この実は何の実？など話ながら歩いていると、山歩きをしている一人



の女性と出会う。途中で別れたが、たしか「植物友の会」の会員とか。ちよつと話しただけでも草木に詳しいのが判る。

二つづ、短く下げて軒の柿

光子

柿吊るす傍に野良着も干されあり

由紀子

柿の皮乾きへの字への字かな

佳与子

草木の名よく知る人と秋の山

由紀子

道連れとなりて別る、山時雨

真理子

造園の早紅葉一本掘りおこし

佳与子

民家を抜けると、

川に沿った細い山道が続いている。雑

木林の所々に紅葉や黄葉が彩なし、み

かんが生るがままに黄色く熟れている。山の田んぼは

「ひつじ田」となり、

黒々とした土の畑



には立派な大根や蕪や白菜が育っている。その畑ごとに囲いがしている。ネット囲いもあれば、太い金網もあり、またトタン板もある。猪垣だという。この辺りには猪も猿も出てくるらしい。猪垣の前の掘りおこされた土は猪の牙跡と真理子さんから説明を受ける。

猪が出るとは聞いておらざりし 佳与子

猪垣のなぞえあきらか猪の跡 真理子

猪垣をめぐらし山家住まいかな 光子

猪垣や猪に掘られし土の跡 由紀子

猪垣の内に農小屋それぞれに 光子

登るほど畑の猪垣頑丈に 由紀子

猪掘りし跡とや雨の溜りたる 佳与子

みかん山裾の畑の柵錆びて 光子

蕪二本うち捨てありぬ山の畑 佳与子

うち捨てし蕪に雨の降りはじめ 佳与子

不出来とも見えぬ蕪を打ち捨て、 真理子

通り抜けできざる山の冬菜畑 光子

からすうり山の畑で行き止まり 節子

鐘の音を聞かずに下りる猪の山 真理子



「海（わだつみ）神社」が山の中腹に祀られている。奈良時代中国の上人が荒津の浜に上陸して油山に登り、一帯を仏教の一大拠点としたと伝えられていることから、海を見渡せる山の中腹に航海の安全を願う「海神社」が祀られていてもおかしくはない。ただ境内の大きな「二宮金次郎像」には、少しの違和感とユーモアを感じる。



昼食と句会場をお願いしている「徳栄寺」に向う。民家のところまで一度下り、ゆるやかな坂道を再び上ると寺への階段が見える。楓の大枝が左右から覆い、紫陽花の枝は刈り込まれ、ゴミや枯葉など全くなくほど綺麗に掃き清められた境内は、京都の寺のような趣きがある。楓は薄く色づいているものとまだ青々しているものが多いが、十分風情がある。

すぐに座敷に案内される。桜の頃のにぎやかな法要の写真が飾られた座敷には、座卓とストープのみ。用意をしていたお弁当とお茶を美味しくいただき、ストープの焚かれる音の中で句作、句会。廊下に出てみると、ガラス越しに裏庭の納屋に乱雑にたくさん薪が積まれているのが見える。これも年木なのだろうか。それにしても寺の廊下は冷える。

寺座敷借りて句会や冬ぬくし

節子

ストープの音静かなる寺の庫裏
節子

磨かれし寺の廊下の冷たくて
由紀子

山里の冬めく寺の長廊下
由紀子

見送りて膝つく坊の廊下冷え
真理子

句会を終えて境内を少し歩く。本堂の傍には行者の滝がある。下には小屋があり、ここで着替えをするらしい。静かで苔生した岩をゆっくり下りる。

行者堂人なく冬の滝の音
真理子

倒木のそのまま沢に冬めける
光子

笹鳴や横穴古墳ちらと見え
真理子

山の中の静かな寺は楓が色づくときさらに風情を増すだろう。思いがけなく見つけた掘り出し物のような寺。長い階段と手入れされた境内が深く印象に残る。

夕映えの西油山薄紅葉
節子

帰りに天然記念物である柴犬のブリーダーの家へ寄る。庭に生後二〜三

ヶ月から一年くらい柴犬が小屋にそれぞれに入れられている。一番小さく可愛い犬を数匹庭に放してくれる。不景気で買っていく人が少ないらしい。急に現実に戻されたが、ここできつちり句にする人もいる。

柴犬の仔のマフラーにじゃれついて 光子

真理子さんとは駐車場にて別れ、また節子さんの車で南福岡駅まで戻り解散。よき一日でした。



【徳栄寺の参道】



【西油山の公園付近】



【徳栄寺境内の薄紅葉風景】



【西油山周辺の木々と実】

第六十二回吟行記

平成二十一年十二月十八日(金)

参加者 佳与子 節子 聖子 光子 真理子 由紀子
キャナルシテイー・中洲川端通り(福岡市)



今年はずっと暖冬と思っていたが、次々に南下してくる寒気団が列島を覆っている。今年最後の句座を油山の麓で行なう予定を立ててもらっていたが、句会前日の予報は雪。山道は凍結注意の予報もでているので、大事をとって急遽博多の街中を吟行することにする。

十二月十八日(金)博多駅に十時集合。予報通りに時折雪がちらつく。積雪はしていないが風が強く寒い。コートの下にたくさん着込んで、丸い体を更に丸くさせている。この寒さが毎日続く北国には住めないだろうなと思いつつスケジュールを聞く。佳与子さんは喉を少し痛めているようで声が嘎れマスク着用。

大雪になるといふ日の博多かな 節子

集合の博多駅前着膨れて 節子

風邪引きのかすれし声の艶めきて 聖子



駅から徒歩十五分の「キャナルシテイー博多」へ向う。ここは言わずと知れた博多の観光スポットの一つで、ホテル、映画館、劇団四季、注目のショップなどが数多く入っている複合商業施設。いつも賑わっているところだが、クリスマスシーズンならではの飾り付けに期待して吟行する。建物の中に入ると、一階中央のキャナル(運河)に据えられたクリスマス飾りが目に飛び込んでくる。絵本の中に迷い込んだようだ。キャナルに架けられた白い橋、小人が出てきそうな家、赤と緑の木の中にある白いトナカイなど狭い空間はクリスマス一色。しばらく飾りや集まってくる人達を眺める。若いカップル、親子連れ、孫らしきを連れた老夫婦など飾りを見ては通り過ぎて行く。

街なかの運河に溶けてゆく小雪 節子



空から雪が降り込んでくる。折畳み傘を広げて外にでようとすが風が強い。小降りになるのを待って中洲川端方面へと向う。キャナルの横を流れる那珂川は中洲を挟んで二手に分かれ、また一つの川になる。天神側の本流は那珂川のままだが、もう一つの中洲と川端町の間を流れる川は博多川という名前が変わる。この短い距離の博多川には歓楽街中洲に繋がる橋が多く架かっている。新しく「夢回廊橋」という名の橋ができてはいるが、それより赤い欄干の橋に惹かれて渡ってみる。鴉が飛び交う橋の向こうには、中洲の古き良き時代の路地が続いているような気がしたのだが、だんだんと店の名前が妖しいものになっている。

鴉飛ぶビルの谷間や風花す

真理子

初雪の花街へ橋の架かりたる

光子

人気なき朝の花橋に風花す

由紀子

大通りにでるとホッとする。中洲のど真ん中の大きな看板や写真を掲げている通りの方が、まだあつけんからんとした感じがするのだが、静かで物寂しさのある妖しい通りは自然と足早になる。

中洲から橋を渡って下川端町の「博多座」に着く。このすぐ裏手に食事処「吉一」がある。ここは山笠吟行の時にも使った老舗料亭で、料理が美味しい。二階の座敷に上がり膳につく。今回は聖子さんが久々に参加することができ、全員参加の年忘れとなる。熱燗を一本注文し、一年の感謝と労いと反省に盃を酌み交わす。



句座博多座の裏手とか年忘

真理子

じゅうたんの廊下につづく冬座敷

節子

一盃の酒に六女年忘

真理子

熱燗の鮎子一本分け合ひて

節子

料亭の障子はビルの壁を裏

真理子



句会場は近くのリバレイン五階の「アトリウムガーデン」。それぞれ吟行して十四時三十分集合することに決める。リバレインの横には「鏡天満宮」の小さな社、中洲に渡る「博多ことぶき橋」、橋を渡った所に「博多人形会館」がある。ここでは主要な博多人形作家の作品をほとんど見ることができし購入もできる。皆は買物方々立ち寄ったようだ。少し近くを散策する。「博多ことぶき橋」下の川中では、浚渫工事をしているのか人がシヨベルカーの近くにいます。仕事をしているふうでもないのか休憩時間なのかもしれない。雪まじりの風を避けるように立っている。橋のあ

たりは海からの風があまりにも強く寒いので、ホテルオークラのロビーでクリスマスツリーを見上げながら時間をつぶす。聖子さんは喫茶室で温かいココアを飲んでいる。皆もロビーに集まり、オークラのパンを買ったり、ツリーを見たり、冷え切った体をほぐしている。

悴みし手ぶれのカメラ又しても

由紀子

こ、博多ことぶき橋の寒風に

節子

時折は日の差す中に雪降り

光子

店番は御内儀一人雪もよひ

光子

川端に寄せて師走の荷をおろす

佳与子

川普請窪地に風をさけながら

佳与子

北風を背に向けて工事の手を休め

由紀子

玻璃越しのビューティーサロン街師走 真理子

「アトリウムガーデン」で十句の句会。作りものなのか本物なのかかわらないが、天井高く枝を伸ばした木々に囲まれたオープンカフェは誰にも気兼ねせず句会ができるので有難い。

ここで解散となったが、帰りに名物「川端ぜんざい」を久しぶりに食べる。



相変わらず甘い。大正初期創業の川端ぜんざいは、その甘さで評判になったが、昭和六十年に後継者がなく閉店。今この味を懐かしんで地元商店街の人たちがアイデアを出し合って「ぜんざい広場」として開店営業し、広場の奥には常時「走る飾り山笠」が設置されている。

福岡市でありながら「博多」の名前が幅を効かす街。博多人形、博多めんたい、博多ラーメンなどなど。商人の街博多の中心がこの川端町であり、城を中心にした福岡との橋渡しの街が中洲である。今は福岡城址に近い天神界隈が賑わっているが、山笠を支える街としていつまでも元気であってほしいものである。





【博多リバレイン】



【食事処「吉一」】



【川端通りの風景】

自選句

(二十六)~(三十一)

自選句 二十六

「平成二十年十二月投句」より

冬風の湾出てゆきし定期船
物産の民芸テーブル炉に灰も
炉の火種煙管に吸ひて好好爺

真理子



絵本読む子の傍らに柿を干す
白鳥と見まがうブイや冬ゆくし
このところひばりの歌を焼詣や

佳与子

花八つ手ノミの跡ある切通し
冬晴れや板の如くにのっばビル
炉明りに灰と志功の菩薩の絵

由紀子

炉火に落つ味噌の白ひや山の宿
湯呑み置き炉の火を埋けて一仕事
みちのくの駅の待合炉を囲み

光子

熱燗を頼んで窓を開け放ち
炬燵にて眠る高野の寺の宿
バス揺れて毛糸帽の子又眠り

聖子

冬の日の落つ能古島志賀島
消えかけの有明の月冬の空
突堤につい座り込み冬ぬくし

節子

「平成二十一年一月投句」より

結界の注連より高くどんどどの火
簡単な神事ありけりどんどど焼き
男の子搦く女の子まるめしお餅かな

佳与子



陰陽の宝珠を拝し年迎ふ
四方に張る注連を揺らしてどんどどの火
岩礁に尖る白波風花す

由紀子

先ず道をつけて迎ふる賀客かな
この小径あの路地も好き冬ぬくし
手のひらにのせくれし柵の花

光子

帰郷して俄か百姓冬大根
元旦にお喰ひ初めとか孫便り
川の字に犬も並んで寝正月

聖子

かき上げる時に鈴の音どんどの火
目立ちゆく献上博多宵えびす
進み行く列車の影や冬田中

節子

御神火の静かに移るどんどどかな
氏子等の狩股休みなき左義長
吹き上がる冬波スローモーシヨンに

真理子

自選句 二十七

「平成二十一年二月投句」より

洋館に煙突三つ寒の晴れ
大仏の裏の地獄絵春を待つ
勤王の尼の庵や野水仙

由紀子



かささぎの枝折る音の冬空に
福豆は奪ひ取るもの福は内
ひととせをめぐりて梅のつぼみして

光子

春時雨古りゆくままの時計塔
春浅し発声練習する鴉
幼な子に手渡す如く豆を撒き

聖子

豆を撒く声護摩堂に雨の寺
ほら貝に始まる寺の節分会
香の浅きハーブ花壇や春を待つ

節子

篠竹の茎のあらわに春寒し
正座して望東尼偲べり梅の庵
道曲りみて山荘の梅盛り

真理子

山笠を飾り櫛田の追儼かな
丁重にシエフの挨拶花ミモザ
草庵の庭とは小さ梅白ふ

佳与子

「平成二十一年三月投句」より

春の水濁して鯉の大ジャンプ
みな傷を負ふて咲きたる山椿
開かむとする意志翅に蝶生る

光子



春暁の中ひっそりと四手網
枯れ枝と見へし先にも花の色
名残り雪降りし比叡の今朝晴れて

聖子

芽柳の堀まで届く川下り
諸葛菜掘割に向く裏庭に
舟から見舟を見てをる柳の芽

節子

からたちの棘を育む春の風
四つ手網かかりし水の臍かな
ひもすがらゆく舟ながめお雛さま

真理子

差して引くたびに舟棹春の水
蜷の道ぶつかりあうて途切れけり
差し交わす枝をくぐりて雛の舟

佳与子

川下る舳先は温む水を分け
川下る舟は雛の館まで
茎立の畑に重たき鎌を入れ

由紀子

自選句 二十八

「平成二十一年四月投句」より

花飛ぶと見えし黄蝶の翻る
見ゆるもの花屑ばかり高瀬川
迷ひ来て老夫に会ひし花の道

聖子



せせらぎは花の流れとなりにけり
列車待つゼロばんホーム花の駅
寝仏の足ふくよかに春風に

節子

賽銭の籠に米粒花屑も
旅終えし前山すでに懸り藤
鶴のひな親指ほどの羽根上げて

真理子

石あれば石の形に花の屑
おずおずと甘茶二杯目申しでて
花ねぎや寅さんふらと出てきそう

佳与子

石楠花や鎖伝いの岩の径
水に浮く御籤大吉花筏
郵便車まだ見えている葱坊主

由紀子

安達太良の山にも白く残花かな
トンネルを抜けるたび濃く春の闇
乗り換への階段駆ける麦青む

光子

「平成二十一年五月投句」より

お旅所へ対岸までの川渡り
神輿待つ対岸すでに賑わいて
あばれ山笠馬簾飛び散る河川敷

節子



彦山の水堰きありし祭川
若蘆の鉄橋一両電車ゆく
祭露地裏に上方香具師らしく

真理子

紙吹雪水にたゆたひ祭りあと
傾ける山笠に昇き手に川しぶき
母の日を母となりたる娘より

佳与子

山車十基通りし後の紙吹雪
鍬少し錆て卵の花腐しかな
鉄橋の上へ下へとつばくらめ

由紀子

納屋口に藜の杖を立てかけて
採石の山直線に若葉風
競ひたる山車のがぶりの笛激し

光子

囀りや鴉来たりて変調す
ひたすらに青葱刻む初鯉
張りぼての鯉も兜も初節句

聖子

自選句 二十九

「平成二十一年六月投句」より

鯨塚といふもの梅雨の網屋町
おきうとの梅雨の店先開け放ち
砂浴びの雀また来て五月晴

真理子



箱崎に鯨の墓標額の花
枝つきの枇杷を山積み小商い
梅雨深し鯨の墓に手を合わせ

佳与子

株ごとに括る紫陽花花まつり
もう風にさやぎてをりぬ今年竹
ポストより取りし朝刊時鳥

由紀子

旅薄暑バッグはライムグリーンに
古着また解きたる母の更衣
我がままに生きること出来風薫る

光子

動く子の手を握りしめ菖蒲園
緑陰や時折鳩の声低く
房なして青きトマトの実りをり

聖子

うつむいて菩提樹の花静かなり
菩提樹の枝を広げて寺の梅雨
妹の夢の続きよ薙漬る

節子

「平成二十一年七月投句」より

火袋に背ナをまるめて梅雨の猫
役職の札貼り出され祭路地
手のごいと博多ではいふ祭かな

佳与子

電話待つ目高の鉢をながめつ、
追い山にカメラのピント合わぬまま
勢い水掛ける祭りの人となり

由紀子

雪溪を抱きし山の朝日かな
清道旗笹も新たに雲の峰
あかつきに山笠解かれ博多かな

光子

追い山笠の前夜眠らぬ人の群れ
解きかけの露店にも客山笠の朝
噴水に突進する子も逃げる子も

聖子

飾り山夜明け前には解くという
大樽に水溢れさせ山笠を待つ
熟れているトマトまで手が届かない

節子

夫婦して山笠休暇願へりと
火の粉散る鶺鴒川の闇の深さかな
宇治川の女鶺鴒とや面ほそく

真理子



自選句 三十

「平成二十一年八月投句」より



街一望涼風抜けし国見岩
ケーブルカー一直線に夏山を
大夕焼千潟の鳥の影冥め

由紀子

お手玉の中の小豆の手に重し
兄弟のみな似て来たる墓参かな
山深き淵の碧さや秋立ちぬ

光子

睡蓮のぎつちりと池覆いたり
目の端に蚊を見て以来落ち着かず
夜濯を今日一日の終わりとし

聖子

白粉の花の香しのびよる窓辺
踊り手の去りし座敷の広さかな
スロープカー気温差五度の涼しさへ

節子

風車はるか皿倉山の老鶯に
流れくる雲につつまれゐて日焼
新涼や浮く雲の下雲ながれ

真理子

蟬の穴どれもきれいな形して
母よりも姑との月日菫の花
読経する尼美しき流灯会

佳与子

「平成二十一年九月投句」より



爽やかや今日一日を掃除して
香を胸に沁みとおらせて桃をむく
我が生を織り成す糸や曼珠沙華

光子

待つ人に色づき始む実むらさき
息つきにリズムの乱れ鉦叩
水じまい終え邯鄲の声高く

節子

蓮の池どこからか風生まれくる
執念の浅き性質なり螻蛄鳴けり
一羽見えみさきぎなりと誰かいふ

真理子

猿の目の冷茶ボトルに注がれて
桜の葉陰より突如鷹渡り
見廻りの夜の水田螻蛄鳴いて

佳与子

しま馬の親子首寄す木陰かな
飛行機の離陸の空に鷹柱
下巻まだ読み終えぬまま秋燕

由紀子

自選句 三十一

「平成二十一年十月投句」より

秋深し吾が心音を確かめつ
体育の日や口ずさむファンファーレ
立ち塞ぐ壁の如くに馬肥ゆる

聖子



見届けし首の痛さよ鷹柱
秋風にのってマイクのテスト中
駅前というも稲田のあるばかり

節子

潮の香を吸ひて岬の馬肥ゆる
寒の犬の爪音秋風に
追ふてきし何か過ぎ去る秋の風

真理子

石垣の隅は手鎌で稲を刈り
新しき木の香の工房酢を造る
門川に小さな暗渠式部の実

佳与子

マネキンと同じコートを試着して
ネクタイをシャツに入れこみおでん酒
秋桜海峡いつも風強し

由紀子

編み飾りたるたてがみの馬肥ゆる
酔芙蓉山の御社より海へ
坂道を自転車押して天高し

光子

「平成二十一年十一月投句」より

からすうり山の畑で行き止まり
夕映えの西油山薄紅葉
美しき人の靴にもいのこづち

節子



縦大樹聳え山寺冬に入る
見送りて膝つく坊の廊下冷え
鐘の音を聞かずに下りぬ猪の山

真理子

猪掘りし跡とや雨の溜りたる
どの家もふた棹ほどの柿を干し
猪が出るとは聞いておらざりし

佳与子

庭手入れ冬めく雲に急かされて
磨かれし庫裏の廊下の冷たくて
市街地を見下ろす暮らし年木積む

由紀子

炉を開きこれを縫はばやあれを編み
二つづゝ短く下げて軒の柿
通り抜けできざる山の冬菜畑

光子

炉開きの帰りしにつく雨となり
初冬や皇帝ダリア聳え咲く
立冬の思ひの外の日和かな

聖子

あとがき

今年も「響風」発刊の季節となった。平成二十一年はどんな年であつただろうか？

年を表す漢字は「新」、「政権交代」の新しい波と共に「事業仕分け」が注目された。

『仕分け人 妻に比べりや まだ甘い』、『仕分け人 口調が妻と そっくりだ』とか言われたが、仕分け会場の体育館も仕分け対象となつてしまった。

また、年初の景気低迷から「派遣切り」が横行し、『会社より ハローワークは 無欠勤』といった事態も顕在化。更に、「新型インフルエンザ」の大流行懸念が追い討ちをかけ、『インフルで会社休むも 支障なし』、『ウチだって インフルだけは 新型だ』などと論理性のない言葉も飛び交つた。こうした中、救世主の如く現れた「子ども店長」が世の中を明るくするかに見えた。

しかし、『子どもでも 店長なのにと 妻なげく』といわれたサラリーマンには、「わしもこんな会社で働きとうはなかつた」と愚痴をこぼしたくなる状況であつた。

一方、ユニクロやH&Mに代表される「ファストファッション」の事業を展開した企業は勝ち組となり、『節約と 人には言わず エコという』といった消費者心理を掴んだ。

また、『激安の ジーンズ父の 勝負服』とよくわからない理屈で頑張つたお父さんもいたらしい。

こんな年の総決算となつた第五号は、「あしや句会」皆様の掲載句と、刊を重ねるにつれ年相応な写真拡大傾向の結果、これまでで最長の約八十ページの大作(?)となりました。俳句には近くて遠く編集担当ですが、『我が思い 十七文字に 収まらず』ということで、編集後記と致します。

■出展：「今年の漢字」「二〇〇九年流行語大賞」「第一生命サラリーマン川柳百選」より

ホームページ・編集担当



響 風 - Hibiki Winds -

あしや句会 第5号

平成22年2月発行

発行人：江本 由紀子